

# 聞名仏教

第 161 号 毎月発行  
(発行日) 2024 年 2 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutuji6@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号 17810 番号 7259431

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

## 疑えぬ信

佐々木蓮磨

一般によく「信じられぬ」「疑いがはれぬ」とコボしますが、それは大変な間違いであると思えます。私は真宗の信心というものはむづかしいどころか、易いも易いも信ぜずにはおられないいわれであると思えます。なぜかといえ、真実を信ずる(信)だからです。

信は得られないでしょう。「昼は明るい、夜は暗い」ということを信じるのはむづかしいでしょうか。「冬は寒い、夏は暑い」ということを、疑う人があるでしょうか。おそらく一人として、疑う人はありません。

ると、われわれの生活そのものは、全く他力の中に携わられているのです。どうタノム、どうスガルなど、考える必要は全然ありません。現在の生活は何物によって保たれているか、ということ明らかに知らせてもらえば、それでよいのであります。

力というものがあるように思い込んでいたところ、よく聞かせていただくと、自力というものの根拠は全くない、と知らせてもらうだけです。捨てることすらも、いらぬいわれであります。弥陀をタノムということも、よくよく聞いてみれば、現在の生活そのものが力が力ではなく、大きな他力のなかしめによっていることが明らかになるのみで、別にタノム必要も、する用事もなくなるわけです。これが自力をすてて、弥陀をタノムという真宗安心の要点であります。

真実というものは、疑おうとしても疑うことのできないものです。法を聞くということは、疑うことのできないわれを聞くことです。ところが世間では「なかなか疑いはれぬ」とか、「信ずるのがむづかしい」とか言っているのですが、それは他力の信と、自力の信とを取り違えているからです。

他力の信とは、それと同じです。自分の力で信ぜずにおこうとしても、信ぜずにはおられぬところを、他力の信とあるのであります。「自力を捨てて弥陀をタノメ」と教えて下さるが、実はよくよく聞いてみると、自力というものはないので、「自分の力というものを用いて、答えることができる人はいません。つまり自分で作らぬのであります。」

自力というものは、あるが如くに考えられておりますが、つきつめて行けば、全く根拠はありません。毎日働いていることも、考えていることもすべてが他力によってなされるに過ぎないのです。食べる食物も、被る着物も、使う道具も、一切合財が他力のお与えでないものではありません。

なんと易いことではありませんか。親鸞聖人は御晩年に「いたせられて、他力ということ自然法爾という言葉で表現しておられます。大谷派の先哲香樹院は、「仏法千差なりといえども要は自然法爾の四字にきわまる」と決断しておられます。まことに他力の救いとは、疑うことのできないいわれです。

なにか自分の心を疑わぬようにしようとか、堅く信ずるようになろうとかかかっているのです。そういう考えで聴聞するならば、おそらく一生涯、弁当持ちでお寺参りしても、

どうして出るのか、自分の所為ではありません。全く他力のお与えというほかはないのであります。よく聞いてみ

したがって、自力を捨てるということも、他力をタノムということも、別にむづかしいことではなく、あたりまえのことであらうだけです。自力を捨てることは、今まで自

# 対話編

## 『浄土真宗』

7

(2) 『阿弥陀仏の救い』

A 「前回、寿命無量には智慧と慈悲、一言でいえば大悲の智慧のはたらきが含まれていることを少し申しました。これをアミダ仏の光明無量のはたらきと申します。この光明のはたらきを中心にこれから述べてみたいと思います」

B 「智慧というのは自他一如の智慧といわれ、アミダ仏は一切衆生をあたかも自己の如くに視、一切衆生の苦悩に共感し、一切衆生に安楽を与えたいという慈悲のはたらきとして活動しておられるということですね」

A 「ええそうです。アミダ仏が衆生に本当の安らぎを与えたいばかりか、仏陀にして他の苦しんでいる衆生を救うていくようなはたらきをさせたいというのがアミダ仏の究極の願いです」

B 「どうしてそうだと私た

ちに分かるのですか」

A 「こういう真理は私たちの凡夫の知性では到底分かりません。それは自他一如・生死一如を完全に覚られた釈尊にして初めてアミダ仏のはたらきを感じ、それを説法された言葉が伝承され、仏説無量寿経（以下『無量寿経』と略称）として、今日まで伝えられました。その経説によつてアミダ仏の願心を知ることができるので」

B 「以前、私たちのいのははかりないのち、いわばアミダ仏と繋がっているの、小さな私たちの心にも慈悲の心がフィと現れることがある、と言われるましたね。たとえば寒い冬の地下道でホームレスの人がうずくまっているのを見た瞬間、（ああかわいそうだ、なんとかしてあげたい）というような心がフィと起こってくるというようなこと

はしばしばありますね。だからといって現実にはほとんど何もできませんが。どこからそういう心が起こるのか、それはその人の人間性が善いからとか性格が優しいからとかいうのではなくて、どんな人にも一瞬だけであつても起こるのは、私たちのいのちがアミダ仏のいのちに繋がっている証拠だと聞きました。これは人間だけでなく、他の動物でも同じで、このことについて

は鈴木大拙博士の最後の文章『東洋的な見方』、岩波文庫、二六八頁）にハッキリと述べられているのですね」

A 「ええそうです。どのような小さないのちにもそういう憐れみの心が起こり得るということによって、はかりなきいのちのアミダ仏にははかりない大悲の心がある徴だといえますね。これを無量の慈悲（智慧）といい、そのはたらきが私た

ちを苦悩から救うべくはたらきかけられていること、それを釈尊は感得して説かれたのが無量寿経だといえましょう」

B 「では無量寿経にはどのようなに説かれているのですか」

A 「それについて、まず釈尊のことですが、釈尊は今からざつと二五〇〇年ほど前、インドの王族の家系に生まれました。青春のまつただ中で人生の根本不安にぶつかり、その解決を求めて王城を出られ、六年間の修行の後、人生の根本的な真理（撰取不捨の真理）に目覚め、仏陀いわば目覚めた者になられました。それが三十五歳の時です」

B 「人生の根本的な不安とは」

A 「端的に言えば、老化し、病気になる、死んでいく、死んでどうなるかという、今日の人の人生のもとにある大きな不安でありストレスです」

B 「釈尊はそれを解決されたのです。どのようにして解決されたのですか」

A 「釈尊は修行者となってインドのガヤの郊外で六年間の苦行の修行をされたのですが、覚りが開けなかつたのです。それで苦行を捨てられたのです」

B 「どんな苦行ですか」

A 「瞑想と断食です。それによつて骨と皮になるほど痩せられました。そこで苦行を捨てられ、ネーランジャーリ川で身を洗い、よろよろになって岸に上がられました。そして村の娘の乳がゆの供養を受けて体力を回復し、今一度禅定に入られて、ほどなく大いなる覚りを開かれたのです」

B 「六年間も苦行をしてきたりを開くことができなかった釈尊が、苦行を捨ててほどなく覚りを開かれたという話ですが、厳しい修行を捨てて悟りを開かれたというのが納得しにくいですね」

A 「ええ、私も長い間、それが疑問でした。最近、やつとその理由を見つけたように思いました」

B 「その理由とは」

A 「これは私の独断と偏見かも知れませんが、釈尊の六年間の苦行の姿は、へどをかして覺りを開きたい、分かつたい、覺って樂になりたい、聖者になりたい」という、ご自身の自我の側から真理に近づこう、覺って樂になりたいという、やはり自我が中心の修行ではなかったかと思えます。ドカーンと一發覺って聖者になりたいという、やはり自我からのガンバリであったと思うのです」

B 「自我の方から真理を得よう、覺ろうとするのは、尊い修行であつても基本は自我の営みなのです」  
A 「ええそうです。それゆえ真理は露わにならなかつたと思えます。これについて西田幾多郎博士の言葉に絶対とは我々が之に近づくと云ふことができないのみならず、之に向ふとすら云ふことのできないものでなければならぬ。人間より神に行く途はない。」  
〔『西田幾多郎全集』第九卷、岩波書店、一九六五年、一四五頁〕とあります。自我の方から

は絶対的な真理に近づくことも、それに向かうこともできないのです。もし自我が肥大化して「俺は覺つた聖者だ」という僥慢でどうしようもない者になりかねないのです。そういう人が時々現れ、人を迷わします。仏教は自我否定の道です」  
B 「では苦行を捨てた釈尊はなぜ覺ることができたのですか」

A 「釈尊は六年間の厳しい苦行をして、その結果、自らが覺つて偉い者になろうという自我のプログラムに従つての修行では覺れないこと、自分の懸命な努力でも真理は覺れないという、自らの自我的な計らいの限界を実感し、目的に向つて自分の側からの努力や頑張りで覺ろうとすることを断念されたのだと思えます」  
B 「それが釈尊の覺りとどう関係するのですか」  
A 「そういう修行を止められたのですが、真理への道は捨てて俗世間に返られたのではありません。苦行を捨てて、体力を回復して、

今度はピツパラ樹の下で静かに坐禅をされたのです。もうその時は坐禅をして覺ろうとか、もう一度頑張つて覺ろうとか、一切そういう意志も計らいも捨てて、ただ坐る。覺ろうとするのとさえ放棄して、ただゆつたりと坐る、坐ることに身をゆだねる。そういう坐禅だったと思えます。そうしたら不思議なことに真理が向こうからやつてきて釈尊を覺らせたのです。その時

のことが自説経(ウダーナ)という經典には、  
実にダンマ(法)が、熱心に入定しつづある修行者に頭わになるとき、そのとき、かれの一切の疑惑は消滅する。  
と説かれています。真理(ダンマ)が修行者に頭わになる、いわば真理の側が修行者に來て覺つた、真理が修行者に覺らしめたのです。このことは道元禪師も  
自己をばこびて万法を修証するを迷いとす、万法すすみて自己を修証するはさとりなり。(『正法眼藏』現成公案)

といわれているように、万法(真理)の方がやつてきて眞実の自己を覺らせるといわれるのです。同じですね」

B 「それに関してですが、眞宗ではよく(自力聖道門)といつて、自力で覺ろうとする道を否定されますが、そこはどうなのでしょう」

A 「自力で覺ろうとするのをもし自力聖道門というならば、それを釈尊の場合でいうと、いわゆる苦行の道のようなものです。それは否定されるのですが、しかしながら覺りへの方便であるともいえます」

B 「そういう場合の方便とはどういう意味ですか」

A 「覺りへと導くお手立てといふことで、釈尊の場合、苦行は無駄なことだつたといふのではなく、やはり覺りへと導く大事な縁であつたといえましょう。自我の努力ではダメだからといつて、何もせず待つておれば覺りが開けるかといふとそれは無理ですね。苦行によつて自力(自我的な努力)では不可能と自覺せしめら

れたのです。そういう自我の計らいが否定されたところに真理が頭わになったのです。ですから苦行は無駄ではなく、覺りへと導く方便だつたといえましょう」

B 「眞宗から言えば自力聖道門の法は方便といわれるのは、そういう意味なのでしょう」

A 「ええそう言つていいと思います。法然聖人や親鸞聖人が比叡山で修行されたことは無駄なことではなく、自力聖道の教えによつて(我が力及ばず)と自覺された、いわば自我の計らいが全面的に否定されたのです。そういう意味で自力聖道門の道は真理にであつたといえましょう。」

B 「では私たちのように初めから眞宗の教えを聞いている者にとっては、自力及ばずと知るのはどこで知れますか」

A 「それは聞法念仏して、何とか信心を得たい、助かりたいと眞剣に念仏聞法し努力することが、逆に私の聞法念仏では救いには手

が届かないと知らされることになり。何とかハッキリしたい、分きたい、信心をいただきたい、助かりたいと努力することを通して、我が力及ばずという我が身の救われ難き身を知ることになります。ただ真宗の場合、注意すべきことは、救いの法は何時でも今すでに与えられているのであって、自力を尽くした後にお助けがあると考えるのは間違いです」

B 「釈尊は覚られてから、どうなされたのですか」

A 「であった真理を説いていかれたのです。ただ釈尊が説法された主な対象は出家者です。在家の人にも法を説かれましたが、その場合も法を覚るには出家になつて専門に仏道に専念しなさいと説かれていました」

B 「いわゆる出家して覚りを開く道を説かれていたのですね」

A 「ええ、やはり、独身となり、戒律を守り、瞑想し、教えを専門に学ぶという道です。ですから悟りを開き

たかつたら出家しなさいとお勧めになったのでしよう。けれども釈尊は出家できない人たちが大勢いてどういう人たちはどうしたら救われるのかを課題にしておられたと思います」

B 「どんな人も救われる道がなくてはならないと思つておられたのでしようね」

A 「ええ私はそう思います。ところがある日、釈尊は全ての人が普通の生活のままて真理にであう道を発見されたのだと思います。それがアミダ仏の本願の法です。それを一般の在家の人に説かれたのではないのでしょうか。この点についてはまだ十分研究されていませんので正確なことは分かりませんが」

B 「釈尊がアミダ仏の救いについて説かれたかどうかはまだ分からないのですね」

A 「そうですね。ただアミダ仏の救いとは南無阿弥陀仏の名を称え、これに於てアミダ仏にであう法ですから、単純でありしかも有効な法です。ただ、釈尊がそれを説かれたとしても最初

は簡単に説かれたのではなにかと思います。そして釈尊が涅槃に入られた後、四〇〇年ほどの間にそれがずっと伝承され、本願の念仏の内容が豊かになり、それが無量寿経にまで展開したといえるのではないのでしょうか」

B 「南無阿弥陀仏という仏の名という言葉による救済が在家の人たちに説かれたのが伝わっていったといわれるのですね。阿弥陀の名による救いは独特ですね」

A 「そうですね、南無阿弥陀仏の原語はナモアミターバであり、ナモアミターユスで、この名を称え、

この名を聞くとともにアミダ仏の心に触れ、アミダ仏にであつて心が開けるといふ経験が起るということ、は当然ありえますから、そういうアミダ仏の名による救いの教えと経験が主に民衆の中に伝承されていったのではないのでしょうか。そしてその経験が積み重なり、豊かに展開して四八願のアミダ仏の誓願が説かれる無量寿経が世に現れてきたの

ではないでしょうか。この点は今研究されつつありますが」

(了)

【住職雑感】正月そうそう能登地方に震度七以上の地震が起こり

正月気分が吹っ飛びました。我が家でも長い揺れを感じ、これは何処かで相当な被害が出たのではなからうかと思つていました。能登地方ということでしたら、能登地方というところで。能登地方は真宗大谷派の大事な地盤で、能登地方だけで大谷派寺院が三五三カ寺あり、一月一四日現在で二六二カ寺が被災し、大きな被害の寺はその中一〇〇カ寺近くあるとのこと

す。まだ未報告の寺もあるとにも金沢方面にも一〇カ寺がかなりの被災をしているとのことです。なお能登地震への援助の募財を東本願寺がおこなつておりますので、救援金をいただけ方は、左の所(御本山)へ直接、郵便局から送金して下さい。

\*口座番号  
00920-3-203053

\*加入者名  
真宗大谷派

\*通信欄に下の文言を記入の事  
令和6年能登地方地震

## 《春季彼岸会》

三月二十二日 (金)

午後二時始まり

法話 念佛寺住職

### \*帰敬式の実施

彼岸会法要の後、午後四時過ぎから帰敬式を行います。ご希望の方はお申し込み下さい。帰敬式とは釈尊のお弟子となる儀式で、法名(釈〇〇)をいただきます。なお、法名を本山東本願寺に登録する費用が一万円かかります。